◎佐々木 閑（しずか）著『科学するブッダ 犀（さい）の角たち』

 (角川ソフィア文庫、2013年)［『犀の角たち』（大蔵出版、2006年）を加筆修正したもの］

**アーリア人の登場と仏教のつながり**（216頁）

　人類の歴史が六千年ではなく十万年、百万年の単位で測れるものならば、そして聖書の記述をそのまま信じる必要がないならば、インド・ヨーロッパ語をユーラシアに広めた未知の民を想定することが可能になる。では、その人たちを我々はなんと呼べばいいのか。…

　学者たちは、**現存する最古のインド・ヨーロッパ語の言語資料であり、インドのバラモン教（およびヒンドゥー教）で現在も最重要の聖典とされている『ヴェーダ』という書物**の中に手がかりを探した。

　『ヴェーダ』はインドに伝わる神の賛歌集であるが、そこでは神々の力を借りて悪人どもを征服する正しき者たち（つまり自分たち）のことを「アーリア」と呼んでいる。そこで、このインド・ヨーロッパ語を使っていたおおもとの人たちは、便宜的にアーリア人と呼ばれることになった。アーリアという呼称はインドの『ヴェーダ』だけではなく、イランやペルシャの資料にも現れるので、かなり一般的なものであったと思われる。あくまで便宜的な呼び名ではあるが、今のところでは最も妥当な呼称であろう。

**侵入そして人種差別**（221頁）

　私が学生のころに習ったのは次のような説明である。

　「インド、パキスタン地方にはインダス文明という高度な古代文明が栄えていた。インダス文明は紀元前三〇〇〇年頃に隆盛期を迎えたが、紀元前一八〇〇年頃までには急速に滅びてしまった。原因は不明である。その後、紀元前一五〇〇年頃からアーリア人が侵入してきて新たな文化を持ち込んできた。これが今のインド文化の基である」。

　今でもこの説は生きているが、違った意見もある。インダス文明そのものが、インド・ヨーロッパ語を使う人たち、つまりアーリア人の文化であったと考える説である。その場合は、インダス文明は実際には滅びていないということになる。紀元前三〇〇〇年以上前に生まれたアーリア人のインダス文明が、そのまま現代まで続いているのである。

　しかしどのような説にしろ、ある時期にインド・ヨーロッパ語を話す人々がユーラシア中央部から北西インドへ入り込んできて、独自の文化を持ち込んだことは間違いない。そしてそれこそが、仏教という世にも珍しい宗教が生まれてくる原因となったのである。

　アーリア人の侵入は、もともとインド亜大陸で暮らしていた原住の人たちとの間に人種摩擦を引き起こし、複雑な身分差別社会を作っていった。上に立つのはアーリア人、下で差別されるのが土着の人たちである。この支配者と被支配者の二重構造を基盤にして成立するのが、ヴァルナと呼ばれる差別制度である。このヴァルナが今でいうカースト制度のもとになる。…

　このヴァルナ制度の頂点に立つバラモンと呼ばれる人々は、祭式を司る一種の祭官であった。彼らはもちろんアーリア系であったが、同じアーリア系でも、神々を交信する能力を持つという点で特にすぐれた者と見なされていた。彼らは、神々の賛歌集『ヴェーダ』を正しく唱え、複雑な儀礼を間違いなく執行することで、その神々と意思の疎通を行える唯一の階級として、当時のインド社会に君臨したのである。…

　バラモン主義社会における身分制度の特徴は、完全な血統性にある。すなわちヴァルナの各身分は生まれによって絶対的に決定されるものであって、生まれた後のいかなる努力によっても変更不可能だと考える点にある。したがってバラモン主義社会では、異なるヴァルナ間の血の交雑を極端に嫌う。それがバラモン主義の基盤である完全な血統性を壊してしまうからである。

　バラモン主義社会はそういった血の交雑を防ぐため、様々な概念や制度を創出してきた。たとえば穢れの概念である。人には階層ごとにレベルの違う穢れが付随しており、その穢れが多いと死後の幸福が得られないと考える。しかもその穢れは接触によって伝承するという。…

　つい最近まで、インドの農村では使う井戸がカーストごとに違っていた。…

　穢れの概念で成り立つカーストの差別意識がどれくらい強烈かというと、インド亜大陸の文化を三千年以上支配するほど強烈だったのである。そのヴァルナ制度が生まれてきた原因がアーリア人の侵入であり、そのヴァルナ制度を否定しようという動きの中で生まれてきたのが仏教なのである。

　こうして、アーリア人という異人種が入り込んできたことによって、インドにはバラモンを頂点とする強固な身分制度が生まれた。「人の価値は生まれで決まる」と主張する社会である。生まれによって人を「気高い」とか「汚らわしい」と決めつける社会である。こういったヴァルナ制度を基盤にしたバラモン主義社会が確立したのは紀元前一〇〇〇年から六〇〇年頃だと言われている。…

**反バラモン教への機運**（227頁）

　紀元前六〇〇年あたりになると、ガンジス川流域での農耕文化も成熟してきて、多くの余剰生産物が生み出されるようになる。つまり「富」が生まれてくるのである。そうなると、その富を一手に集め、世の中を自由に支配できる者は、王侯・貴族階級であるクシャトリアたちということになる。明らかに自分たちが世の中で一番だと分かっているのに、それでもバラモンに頭を下げて、その権威にひれ伏さねばならない。その不満が次第にクシャトリア階級の中に鬱積（うっせき）してくる。そしてその鬱積は、バラモン教を否定する新たな宗教運動へと発展していく。クシャトリア階級を中心として、反バラモン教の機運が高まってくるのである。

　バラモン教は「人の価値は生まれで決まる」という。それが矛盾の源なのだから、まずここを否定しなければならない。人の価値が「生まれでは決まらない」のなら、一体なにで決まるのか。新たな宗教運動の人たちは、「それは努力だ」と主張した。人は生まれた時に優劣が決まるのではない。人に優劣があるなら、それはその人が生まれた後に、どれだけ努力をしたか、その努力の量によって決まるべきだと言ったのである。

　バラモンは、自分たちの執り行う儀式が人間と神との絆になるのだから、儀式こそがこの世で最も重要な行為であると言った。そう言うことによって、その儀式執行権を独占している自分たちの地位を絶対化しようとしたのである。反バラモン教の人たちは、そういった儀式絶対主義も否定する。…

　このように反バラモン教の立場に立って、努力にこそ人の価値があると主張した人たちは、その主張内容から「努力する人」と呼ばれた。インド語ではシュラマナという。それが中国に伝えられ、音写されて「沙門（しゃもん）」となった。現在の日本で沙門というと仏教のお坊さんを指すが、本当は、バラモン教に反対して自分の努力で最高の幸福を手に入れようと考える修行者すべてが沙門である。…

　ブッダ時代のインドでは、反バラモン教の立場に立つ大勢の沙門が現れ、各人それぞれが独自の修行方法を考案し、様々な沙門宗教が並び立ったのだが、それらのほとんどは歴史の中で消滅してしまって、インドから外部世界にまで広がることができたのは仏教だけだった。…

ブッダの時代、一体どれくらいの沙門が現れたか、今となっては全く分からない。仏教のお経に「六師外道（ろくしげどう）」といって、仏教以外の六人の沙門のことが詳しく出てくるし、「**六十二見**（ろくじゅうにけん）」といって**六十二種類の異なる修行者の意見があった**ということも書いてある。しかし実際のところは不明である。（231頁）

ともかく、反バラモン教という一点では共通していても、ではどのような努力をすることで真の幸福が得られるのかという肝心のところで共通した見解がなかったことは分かる。**「努力とはなにか」という問いに対する答えが、皆ばらばらだった**のである。このような状況で、**沙門たちの修行形態は大きく二つの方向に向かった**。**苦行と、苦行を伴わない瞑想**である。

**苦行か瞑想か**（231頁）

**苦行というのは、肉体に苦痛を与え、それによって自己の精神パワーを高めていって、幸福の境地に到達しようという考え**である。

私は田舎育ちだが、小さい頃の田舎町にも「**インド大魔術団**」なるものがたびたびやって来て、いろいろ面白い出し物を見せてくれた。**火の上を歩く男、お腹に鉄串を突き通す男（突き刺すのではなく突き通すのである！）、上向きに並べた剣の上に身体を横たえる男、爪を切らずに伸ばし続ける男など、珍妙キテレツな人間が次々に現れてきて、普通の手品ショーとは違う異様な雰囲気に圧倒されたおぼえがある**。**マジックではなく、本物だから迫力がある**。こんな人ばかりいるインドというのは一体どんな国なのか、これがきっかけで仏教学者になったわけではないが、インドという国の名がこの時脳裏に焼き付いた。

**この大魔術団の人たちの源流が苦行である**。**インドには古くから苦行によって超越したパワーを手に入れることができるという考えが根づいていた**。…

反バラモン教を標榜する沙門が登場した時、その中の多くの者は、「努力」の具体的内容として、この苦行という伝統的修行方法を採用した。ただしその目的は、バラモン教を超えて真の幸せを手に入れることにあり、その点でそれまでの苦行者世界とは本質的に異なるものでもあった。バラモン教の儀式主義を否定し、苦行のパワーで真の幸福をつかもうと考えた大勢の沙門たちが、インドの森の中で修行生活を送っていたのである。

**このような、苦行を主体とする沙門たちとは別に、苦行を伴わない瞑想を努力だと考える沙門たちがいた。その代表がブッダである**。ここでブッダの伝記を思い出していただきたい。知らない人は思い出せないかもしれないから、私が手短かに物語ろう。（233頁）

**ブッダは瞑想を選択する**（233頁）

ヒマラヤ山脈の南側、今のネパールとインドの国境近くにカピラヴァストゥという地域があり、ここを治めていたシュッドーダナという王様の一人息子がブッダである。つまりインド北方の小さな国の王子として生まれたのである。もちろん生まれた時から「ブッダ」などと呼ばれたわけではない。普通の赤ちゃんとして生まれ、名前はガウタマ・シッダールタといった。

王子として成長したガウタマさんは、やがて**物質的幸福の限界を感じるようになる**。特に「年をとらねばならないこと」「病気の苦しみから逃れがたいこと」「必ず死なねばならないこと」（老・病・死）という、万人共通の苦しみを強く意識するようになり、思い悩んだ末、出家を決意する。（234頁）

出家というのは単なる出奔（しゅっぽん）ではない。現世の価値観にどうしても満足できない人たちが集まって作る島社会がこの世には各所に存在するが、自分も俗世の生活を放棄して、**そのような島社会のメンバーとして参入すること、それが出家**という行為の意味である。悪い例だが、オウム真理教事件の際に、勧誘された若者が家族親戚を捨てて教団の一員として参入していった。あれが出家の基本形である。ただ単に世をすてて庵を結ぶことが出家とは言わない。**特定の島社会の一員にならなければ出家したとは言わない**のである。

ともかく、ガウタマさんは出家を決意し、皆が寝静まった真夜中に、そっと城を抜け出して森の中に入っていったのである。出家したということは、彼はなんらかの特殊な価値観を持った島社会のメンバーになったということだが、それがどのような島社会なのかというと、まさにそれこそ、今まで私が延々と説明してきた、沙門と呼ばれる人たちの社会だったのである。

沙門社会の持つ特殊な価値観とはなにかといえば、当然、例の「**努力によって最高の幸福を獲得する」という思想**である。沙門たちの多くは森の中に入って努力していた。これが、ガウタマさんが城を出て森の中に入っていった理由である。**彼は一人で森の中に入って世捨て人になろうとしたのではない**。森の中で暮らしている沙門たちの世界に、**メンバーとして加えてもらうため入っていった**のである。

その証拠に、彼はすぐさま、森の中で修行に励む先輩沙門のところへ行って弟子入りしている。アーラーラ・カーラーマ、ウドラカ・ラーマプトラという面白い名前の二人の先輩沙門に次々弟子入りし、まずは精神を集中する方法を学んだのである。

こうして基本的な修行のスキルを身につけた後、いよいよ彼は自分独自の「努力方法」を見つけるため、一人で自立する。そしてここがポイントだが、ガウタマさんは最初、肉体を苦しめる苦行の道を選んだのである。具体的にどういう苦行をしたのか詳細は分からないが、断食を主体とした、骨と皮ばかりになる過酷な修行だったらしい。そしてどうなったか。

**ガウタマさんはそれを途中でやめてしまう**。**やめて、近くを通りかかったスジャーターという女の子から乳粥をもらって体力を回復し、別の形態の努力、すなわち苦行を伴わない純粋な瞑想という努力方法に専念した。坐禅である**。（235頁）

そしてほどなく、悟りを開いた。悟りを開いた時点でガウタマさんはブッダとかあるいは釈尊（正確にはシャーキャムニ）などと尊称で呼ばれるようになったのである。この、一旦選択した苦行という方法を捨てて瞑想一本でいったという筋書きが重大な意味を持つ。（236頁）…

　古代のインドという国は、歴史的事実をありのままに後世へ伝えようという気持ちがほとんどなくて、物語というものは作者が自己の立場・見解を主張するための手段だと考えられていた。ブッダが実在の人物であったかどうか、それさえもはっきりは断定できない現状において（十中八九実在したと思うが）、現在伝わるブッダの伝記が信用できるという確証はない。

　しかし大切なことは、その伝記が、仏教という宗教の本質を伝えたいという意図のもとに編纂されているという事実である。ブッダという一個人に関する情報源としては不明確かもしれないが、作者の意図に沿って見ていくことで、その当時、すなわち仏教興隆時代に、仏教世界にいた人々が、自分たちの仏教をどう見ていたか、その視点が分かる。

　今の私に必要なのは、その視点である。別にブッダが実在の人物でなくても構わない。重要なのは、ブッダを教祖そして立てる仏教という宗教が古代インドに実在しており、その仏教の持っていた基本姿勢が、仏伝などの残存資料を通して見えてくるということなのである。

　そこで今の苦行の問題だが、**我らが教祖ブッダが、最初は修行方法で間違いを犯した**のである。本当に智慧のある偉い人なら、最初から瞑想に入って一発で悟るはずだ。もしブッダを称えることだけに主眼を置くのなら、こんな恥になるような話が伝記の中に入ってくるはずがない。ということは、この苦行のエピソードは…「仏教は本質的に苦行を否定する宗教だ。瞑想一本でやっていく宗教なのだ」という主張を表していると理解できる。

ブッダは苦行を知らずに、たまたま思いついた瞑想という方法でたまたま悟ったのではない。**ちゃんと苦行もやってみたのだ。その結果、それが無意味だということを理解し、その上で瞑想という方法を採用した**。したがって、**悟りを開くことのできる努力方法は、瞑想しかないということが確定**する。これがこのエピソードの意味である。そしてそのことから、**当時の仏教という宗教が、瞑想を用いて悟りを開くことを目的とした宗教であったという、歴史的事実が判明する**のである。（237頁）